

## 伝統音楽を インスピレーション源に みずからふさわしい音楽を紡ぐ

取材・文 / 村尾泰郎  
Interview & Text by Murao Yasuo

古くから伝わる弦楽器、カンテレと多彩なコーラスを駆使するフィンランドの女性4人組バンド、カルデミンミット。子供の頃から一緒に音楽学校でカンテレを学んできた4人は、全員20代にして18年近いキャリアを持つベテラン揃いだ。「伝統音楽からインスピレーションを受けながら、いろんなジャンルの音楽の影響を受けたオリジナルな曲をやってる」(マイヤ・ボケラ)という彼女たちの新作「白夜」は、前作に続くセルフ・プロデュース作。それぞれ2曲ずつ曲を書くなど、そこには4人の絆と自信が窺える。

「私たちはこれまでの活動を通じて、バンドにふさわしい音を見つけてきたと思って。ヴォーカルを前に出しながら、カンテレは伴奏だけでなく、曲のなかで重要な役割を果たす。そういうスタイルをもとにしながら、さらに発展させたアルバムにしようと思ったんです。そこに遊びを入れたりして」(ユッタ・ラーメル)

その“遊び”の面白さを感じさせる曲のひとつが「ガラスの電」だ。そこにはモダンなグルーブが息づいている。

「ポップというかジャズ寄りの曲かな。私の

ボーイフレンドは“ディテクティブ・ジャズ”って呼んでる(笑)。私立探偵が出てくるサスペンスの音楽みたいなのがあるから。このグルーブは直感的に生まれたんです。音はいろいろ分析して曲を書いていたけど、最近は自分の心に素直に書こうと思っていて」(ユッタ)

また、古い詩に曲をつけるのも彼女たちの手法のひとつだが、詩の内容を変えることで今の時代を生きる彼女たちのナマの声が反映されているのも面白い。たとえば「よそ者」は結末を変えたとか。

「抑圧された女性が最後に自信を取り戻す、という大筋の内容は変わらないけど、元の歌詞ではお金持ちの男性と結婚する、という結末だった。でも、今の社会でそういう結末は嫌だったから、自分の力で元気になっていく女性にしたんです」(レーニ・ヴェゲリウス)

いっぽう、ハーモニーに関しては、フィンランドの伝統音楽はソロで歌われハーモニーがないため、4人でアイデアを出しながら考えていくらしい。

「フィンランドのロシア寄りの土地に住む民族や、ヨーロッパのほかの国の音楽から影響を受けています。あとカンテレの響きからも。私たちは譜面に起こさず、その場で聴いたり歌ったりしながらハーモニーを作っていくから、ほとんど即興なんです」(アンナ・ヴェゲリウス)

そういったことができるのも、長年4人で一

緒にやってきたからこそだろう。伝統音楽という豊かな土地に咲いた新しい花、それがカルデミンミットなのだ。

「10代の頃は毎週のように一緒に演奏していたし、みんなで演奏旅行にも出かけていた。ずっと一緒だから、それぞれに影響を与え合ってきたの」(ユッタ)

「18年も一緒にやってるから、どんな音楽を聴いて自分たちのスタイルが生まれたのか、その源を辿るのは難しいと思う」(マイヤ)

「ほんとは歴史が長いよね、私たち」(レーニ)

「これからも、まだまだ続くと思うけど!」(笑)  
(アンナ)

## Profile

フィンランド・ヘルシンキの隣町、エスボーにある音楽学校で伝統楽器のカンテレを弾いていた女性4人、マイヤ・ボケラ、ユッタ・ラーメル、アンナ・ヴェゲリウス、レーニ・ヴェゲリウスからなるグループ。伝統音楽をベースにした音楽をカンテレとコーラスで奏でている。1999年に結成し、2006年にデビュー・アルバム「Virta」を発表。2017年11月から12月にかけて来日公演を行ない、12月に5枚目のアルバム「白夜」を発表。

## New Album



### 白夜

(キー・ヒット・ミュージック・KJT-004)

# KARDEMIMMIT

Artists Interview World Music

カルデミンミット

